



青橋由高短編集 15

とろけ続ける恩返し

ADULT ONLY

AOHASHI SHOUTEN

『あおはしゆたか青橋由高短編集15

とろけ続ける恩返し』

青橋由高

目次

『シングルマザーのとろける恩返し』

『逆バニーのとろける恩返し』

『未亡人のとろけすぎた恩返し』

『そして未来もとろけ続ける』

あとがき

4

35

73

96

103

『シングルマザーのとりける恩返し』

「ママ、パパ、行ってきまーす！」

まだまだ肌寒い日の続く三月、紫織しおりの一人娘である莉子りこが祖父母の家へと泊まりに行った。当初は紫織も一緒に実家に帰るつもりだったが、

「ダメでしょ、ママ。こういうときこそ、壮介そうすけパパにがちりアピールしないと。沙霧さぎりお姉ちゃんや結季ゆきママに負けちゃうよ？」

まだ幼い娘にそんなことを言われ、拒まれた。

「お前、今度は失敗するなよ？ あれは歳食ってるが、悪くない。いや、かなりの好物件だ。しっかりキープしておけよ？」

「バツイチ子持ちの上、アンタみたいにめんどくさい女でもいいって言うてくれる男なんて、もう二度と現れないんだから、絶対に逃がしちゃダメ！」

さらに、孫を迎えに来た両親にも念を押されてしまう。歳の離れた壮介との交際を反対されるかも、という懸念は杞憂に終わった。

（お母さんもだけど、お父さんと壮介さん、妙に意気投合してたし。世代が近いから、かな？ ううん、壮介さんの人柄のおかげよね）

さすがに結季や沙霧とのことは話せていないが、なにかしら複雑な事情があるらしいとは勘づいているようだ。が、娘や孫が幸せに暮らしているとわかったのか、深く踏み込んでこない点はありがたかった。

(まあ、壮介さんの外堀を埋められるのは、私にとってもありがたいけれど。結季さんも沙霧ちゃんも、手強すぎる相手だもの。……よし、私も頑張ろう、うん) 娘に乗せた両親の車を見送った紫織は、むん、と気合いを入れるのだった。

莉子が祖父母の元に向かったこの日の夜、壮介は自室で首を捻っていた。

(んー？　ここ、なんで外れないんだ？)

先程から格闘しているのは、結季の亡夫のコレクションの一つ、LDプレイヤーだ。目録作成の時点で故障はわかっていたが、沙霧と莉子がこれで映画を観たいと言ったので、修理を開始したところだった。無論、結季の許可は得ている。

「お、外れそうだ……っっ!」

保存状態がよくなかったのか、僅かに歪んだ筐体をどうにか外せたものの、力を入れすぎたせいで指を切れてしまう。幸い傷は浅く、ちょっと血が滲んだ程度で済んだ。

「あ、私が貼りますよ。指、出してください」

居間に絆創膏を取りに来ると、夕食の後片付けをしていた紫織に見つかった。今日は結季と沙霧は用事があって不在のため、久々に二人きりだった。

「ああ、ありがとう。……紫織？」

綺麗に絆創膏を貼り終えたあとも、紫織はなぜか壮介の指を離さない。さわさわと、怪我をしていない指も撫で回してくる。

（そっぴや紫織、俺の指が好きって前に言ってたな。こんなごつごつの指のなにかいいんだか）

美女にうっとりとした顔で指を撫でられるのはもちろん悪くない気分なので、壮介はなにも言わず、じっとしている。

「こうしてると、前の家での生活を思い出すな」

「ふふ、私も同じこと考えてました。結季さんや沙霧ちゃんとの生活も楽しいですが、親子三人ってのも、心惹かれます」

「まあ、今日は莉子がいないけどな」

「だったら親子三人じゃなくて、夫婦水入らず、ですね」

先程よりもねっとりとした手つきで壮介の指をいじりながら、紫織が艶めかしい視線を向けてくる。

「ふ、夫婦って」

「籍をまだ入れてないだけで、実質、夫婦みたいなものですし。……あら？ 壮介さん、少し爪、伸びてませんか？」

「ん？ ああ、確かに。忘れないうちに処理しておくか。……はあ」

紫織たちと関係を持って以降、壮介は爪の手入れをそれまで以上に意識するようになった。女体のデリケートな部分をいじる機会が増えたためだ。

「壮介さん、爪切り、嫌いなんですか？ ため息なんてついたりして」

「いや、面倒なだけさ。老眼のせいで疲れるし」

「作業用のグラス、ありますよね？ 修理のときに使ってる」

「ああ。でも、修理とかは趣味だから楽しいが、自分の爪だと、テンション上がらないんだよな。別に面白くないし」

「でしたら、ネイルとかどうです？ 最近は男の人もやっていますし。あ、私がやりましょうか？」

「どちらかというと、されるよりもするほうに興味があるかな」

細かい作業が好きな壮介が何の気なしに口にしたセリフに、紫織の目が陰しくなってきた。

「もしかしてもう、誰かにしたんですか。結季さんとか沙霧ちゃんとか」

「してないって」

紫織の嫉妬深さを思い出し、壮介は内心で焦る。

(しまった。紫織は一度疑うと、なかなか納得してくれないときあるんだよな。ここは話題を逸らさないと。……よし)

「あ、あのさ、もし紫織がよければだけど、俺の爪、切ってくれないか？」

紫織が莉子の爪を切っている場面を思い出した壮介は、咄嗟にそう頼んでみた。

「そ、そんなにしっかり、丁寧にはやらなくていいぞ？ 一応、ヤスリは毎日かけてるし」

紫織の爪の処理は、予想以上に丁寧だった。

「ええ、わかってます。私たちのために、ですよ？ でも、あんまり切りすぎるのもよくないですよ？」

しかも、足の指の爪まで手入れしてくれた。嬉しさと気恥ずかしさでどうにも落ち着かないが、悪い気分ではなかった。

「前の家するときも、言ってくればやってあげましたよ？」

「家事をしてもらった上、おっさんの爪を切らせるとか、どんだけ面の皮が厚ければ言えるんだよ。……ありがとな、紫織」

「あ。まだ終わってませんよ。次はマッサージもしますから。手や足裏にはいっぱいツボがありますし」

「いやいや、もう充分だって」

世話好きの紫織は、明らかに不満顔だ。

「俺、そろそろ風呂入らないとだし」

「わかりました。では私も一緒に入って、続きをします」

「……わ、わかった。じゃあ、よろしく頼む」

突然の提案に頷いた壮介は、そのまま紫織と二人で浴室へと向かう。紫織の有無を言わせぬ表情に押されたこともあるが、それ以上に、一緒の入浴に心惹かれた、というのが本当のところだ。

「うふふふ、そんなに見つめられたら、恥ずかしいです。私の裸なんて、もう見飽きてるでしょうに」

「きみの裸は確かに何度も見させてもらったけど、全然飽きないよ。むしろ、どんどん興味湧いてくるくらいだ」

先に湯船に浸かった壮介は、身体を洗っている紫織の裸体に視線を注ぎながら言う。女盛りを迎えつつある三十一歳の肢体は、何度見ても飽きることはない。

「そんなに見つめられると、恥ずかしいです」

紫織がもう一度、同じセリフを口にする。

「す、すまん」

慌てて目を逸らすと、

「どうして見てくれないんです？ 私の裸は、見る価値もないんですか？」

今度は恨めしげに睨まれた。

「俺にどうしろと」

「私は恥ずかしいのが嬉しい変態女だと、壮介さんはご存じでしょうに。ここはねちねちと視姦しながら、私を言葉でも辱める場面です」

期待に満ちたまなざしを無視するのも難しく、壮介は紫織のリクエストの半分だけに応えた。さすがに言葉責めはできなかつたため、黙って女体を見つめ続ける。

（肌、白いな。すべすべだな。お湯で濡れてるせいかな、余計にエロっちな。そして、胸、とんでもなくでかい。ちょっと動くだけでぶるぶる揺れて、凄い。マジ、凄い）

壮介は湯船から身を乗り出し、紫織の股間も覗き込む。ハート型に整えられた秘毛は濡れて恥丘に貼りつき、妙な艶めかしさがあった。

「はあああ……壮介さんの目、たまりません……お風呂に入る前にのぼせそうですよ。……次は、歯磨きですね」

身体を洗い終えた紫織の手には、壮介が普段使っている歯ブラシがあった。

「ん？ それ、洗面所にあったやつだろ？」

「はい、壮介さんの歯を磨いてあげようと思って、持ってきました。さ、お口をあーんしてください」

「いや、さすがにそこまでしてもらうのは」

「私がしたいんです。安心してください、莉子で経験してますので」

こうなった紫織にはなにを言っても無駄とわかっていてる壮介は、観念して口を開く。美女に向かって無防備に口内を晒すのは、なかなかの恥ずかしさがあった。

（お、俺の口、臭くないよな？ 大丈夫だよな？ もし、紫織に顔を背けられでもしたら、俺、立ち直れないぞ!? 中年男のハートは脆いんだぞ!?）

幸い、紫織の表情が曇ることはなかった。むしろ楽しげに壮介の口の中を覗き込み、たっぷり歯磨き粉を乗せた歯ブラシを入れてくる。

「痛かったり、苦しかったりしたら言ってくださいね」

「お、おう」

紫織は左手で壮介の口を固定したり広げたりしながら、右手の歯ブラシで器用に磨いてくる。

（確かに慣れてるな。それに……うん、誰かに歯を磨いてもらうのは、なかなか気持ちがいいもんだ）

気恥ずかしさを上回る心地よさに浸っていた壮介だったが、二つ、気になる点があった。一つは、歯磨きの時間が思っていたよりもずっと長かったこと。もう一つは、そのせいで口内に溜まった涎が垂れそうになっていたことだ。

「あ、涎が垂れるのは気にしないでいいです。ここ、お風呂場ですし、壮介さんの涎なら、むしろ大歓迎ですから」

そう言われても、紫織の綺麗な指を自分の涎で汚すのは憚られたし、なにより、相
当に恥ずかしい。

「うふふふ、壮介さんの無防備なお口、可愛い……っ」

(ま、まさか、わざとか……!?)

ブラッシングを終えたあと、今度は舌を指でねちゃねちゃといじってくる。強引に振り払えなくはないが、楽しい紫織の表情を見ると、それもできない。結局、壮介はただだらと涎を垂らす、みっともない姿を紫織に晒すことになった。

「今日のきみは、ずいぶんと機嫌がいいな」

「壮介さんと二人きり、こうして新婚さんみたいにいちゃいちゃできてるんですから、当然です」

「新婚……っ」

齒磨きを終えた紫織と二人で湯船に浸かっていた壮介は、すぐ目の前でこちらを見つめてくる全裸美女のセリフに、胸を高鳴らせた。

「あ。三十路過ぎのバツイチ女のくせに、とか思いました？」

「まさか。俺のようなジジイにはもったいないシチュエーションだな、と思っただけさ。でも……ああ、確かにこんなのもたまにはいいな。年甲斐もなくどきどきしちゃう」

「壮介さんさえよければ、いつでもどこでも、いちゃいちゃ、ねちゃねちゃ、してくださいね」

「ねちゃねちゃって……おっ？」

苦笑した壮介の指が、紫織に咥えられた。柔らかな唇に挟まれた指先が、温かい舌でちろちろと舐められる。続いて、先程うがいをしたばかりの口の中に、紫織の指が突っ込まれた。

「実は私、ずっとあなたにしてもらいたいことがあったんです。今夜、それをお願いしても……？」

「ああ。俺にできる範囲なら、なんでもいいぞ」

「ありがとうございます。じゃあ……私を思い切り引っ搔いてください。噛んでくだ

さい。血が出てかまいませんので」

「!?」

予想外のおねだりに、壮介は思わず口の中の指に軽く歯を立ててしまった。

「あうっ!」

「すまん、大丈夫か!」

「はあん、すぐにお願いを叶えてくれるなんて、さすが壮介さんです。さ、もっと、もっと噛んでください。噛み噛みは、これまで何度もしてくれただじゃないですか。えいっ」

紫織は壮介の口から指を引き抜くどころか、さらに一本追加してきた。しかたないので、壮介は慎重に歯を立ててやる。

「あああ! もっと、もっと強くしてもいいですよお……私がマゾなのは、あなたが一番ご存じのはずですう……」

スイッチの入った紫織の艶めかしい表情に、壮介の中の牡も目を覚ます。

「ああ。きみが本当にどうしようもない変態だってことは、誰よりも知ってるさ。……どこを噛んだり、引っかかれないんだ?」

口の中の指を甘噛みしたまま、紫織に尋ねる。

「全身、お願いします。身体の全部で、あなたを感じたいんです。でも……そうです

ね、首筋と、腕を特に重点的にお願いします」

「?……了解した」

なぜ首と腕なのかはわからなかったが、壮介は紫織の要望を受け入れた。

(この綺麗な肌を俺が……っ)

白く、滑らかな美女の柔肌に自分が傷をつける。その背徳的な行為を想像し、壮介は昂ぶった。

「本気でつらいときは言えよ?」

「はい……アアアッ」

湯に浸かったまま、壮介は紫織への責めを開始した。まずは希望どおりに首筋に噛みつく。もちろん、血が出るまでするつもりなどないので、慎重に加減しつつ、だ。同時に肩や背中に爪を立て、ゆっくりと引っ掻いていく。

「つつ……くっ……はうう……壮介、さあん……シンンッ」

こちらは、噛むときほど気を遣わなくて済んだ。日頃から爪はかなり短くしていたし、なにしろつい先程、紫織に手入れしてもらった直後だからだ。多少強めにしても、肌を裂くことはないはずだ。

「もっと、もっと強くっ……あっ、あっ、私をキズモノにしてください、あなただけ、あなた専用の女の証、いっぱいつけてください……ひいいッ!」

男心をくすぐるセリフについて、顎と指に力が入ってしまった。壮介は一瞬焦るが、紫織はまだまだ物足りないといった顔でこちらを見つめてくる。

「いいだろう。きみが俺の所有物ってことを、この身体に刻み込んでやる」

そう宣言すると、壮介は女体のあちこちに歯と爪を立て、三十一歳のマゾ美女を嬲り出した。

（ああっ、ケダモノモードになった壮介さん、素敵……！ もっと、もっとですよ、変態の紫織をいっぱい、徹底的にいじめて、辱めて、躡けてくださいっ！）

紫織の倒錯した要望に対し、壮介はしっかりと応えてくれた。贅沢をいえばもう少し乱暴に、荒々しく、血が出るくらいに噛まれ、引っ搔かれないところだったが、心優しい壮介にはこれが精一杯だと紫織も理解していた。

「ひっ、うひっ、イイッ……ああん、歯形、もっと、もっとつけてください……身体中、引っ搔いてください……はううッ！」

紫織は湯船に浸かったまま、倒錯した、しかし紛れもない愛撫をされ続けた。向かい合ったときは乳房を、背を向けたときは尻を、それぞれ重点的に嬲られた。

（痛い……でも、それがイイ……身体中、壮介さんの証でじんじんの幸せえ……

…ああっ、痛いのにイッチャう……私、どうしようもないマゾ女あ……！）
心の中で己を罵倒することで、さらに感度が上がる。背後の壮介の剛直に尻肉を擦りつけるように、勝手に腰がくねる。

「はっ、はっ、はっ……あひいいいーっ！ イク……イック……！」

肩口を強めに噛まれながら、うなじから腰まで一気に引っかけられた刹那、紫織は被虐の牝悦に至った。美尻がびくびくと跳ね上がり、そのたびに浴槽の湯が溢れ出す。

（今の、凄かったあ……おっぱいもオマ×コも触られてないのに、思い切りイッチャった……あ）

深度は浅めだったが、それでも充分な絶頂に肢体が小刻みに震える。このまま幸せな余韻を味わおうとするも、サドスイッチの入った壮介はここで追撃を仕掛けてきた。

「まだだ、もっと可愛がってやるぞ、紫織」

「ま、待ってくださいいっ、私、今、イッたところ、ろおおおンン!?」

湯船から飛び出していた尻が、強く叩かれた。女体の芯に、子宮に衝撃が伝わり、媚唇に愛液が滲む。スパンキングは紫織のみならず、結季や沙霧も好むプレイだ。だが三人それぞれ、感じるポイントや強さ、角度が微妙に異なる。

（壮介さん、わかってる、私が一番好きな叩き方、完璧にわかっているう！ ああっ、イヤ、そんなにお尻ぺんぺんされたら、紫織は、紫織はすぐに……！）

壮介は見事に、紫織が最も悦ぶスパンキングを繰り出す。打ったあと、柔肉を鷲掴みにして爪を食い込ませてくれるのも、たまらなかつた。叩かれるたびに尻が跳ね上がり、もっと、もっとと卑猥に左右に揺れ動く。

「あああ！ あふううん！ ひいーっ！ あーっ、あーっ、ああああーっ!!」

浴室のため、打擲の音が強く反響する。責められている実感が増し、紫織はより高まる。

「イヤ、イヤ、やめ、やめてくださいっ！ ああっ、お尻叩くのダメ、痛いんです、ああ、惨めなんですう！ 許して、許してください……ヒィーッ！」

まったく心にもないセリフは、止めを刺して欲しいという紫織のおねだりだった。マゾのわがままなリクエストに応え、壮介はこれまで以上に強烈な一撃を加えてくれた。

「イッ……イッグ……イグ……おひりでイクう……ひっ、んひっ、いひいィーッ!!」
真っ赤に腫れた尻を随喜に震わせ、紫織は被虐のオルガスムスに嬌声を響かせた。

「これでいいんですか、壮介さん？」

スパンキングアクメの余波が色濃く残る中、紫織は壮介に命じられるまま、浴槽に

もたれかかった。このあとなにをされるのかと、期待に胸が高鳴る。

「ああ。次は、風呂の縁に両脚を乗っける」

「は、はい……ああん、恥ずかしいです……っ」

屋上のペントハウスと違い、ここの浴槽は一般的なサイズだ。それでも、大きく股を開く格好になってしまう。まるで、壮介に秘所を見せつけるような己の姿に羞恥と、そして興奮を覚える。

「ずっと湯船に浸かっているとよぼせるからな。これなら、いくらかは楽だろ？」

どうやら壮介は紫織の湯中りを心配してくれたらしい。確かにこの体勢なら湯に浸かるのは腰だけになる。しかし、ただ身体を冷やすのが目的ならば、風呂から出ればいい。

(つまり、壮介さんには別の狙いがあるんですね？ さらに私を辱めてくれるんですね?)

次のプレイへの期待に、女陰に秘蜜が分泌される。

「マ×コがひくひくしてるな。恥ずかしいんじゃないのか？」

「はうう、壮介さんの意地悪う。私が、紫織がこういうので興奮する女だって、一番知ってるくせにい」

「ああ、よく知ってるぞ。恥ずかしいのと、痛いのが好きな、救いようのない変態

だっってことをな」

にやりと笑った壮介が、紫織の内腿に歯を立ててきた。

「ああああっ！ そ、そんなところ、までえ……くっ、うっ、うううっ！」

柔らかく、敏感な部分を噛まれる衝撃に、紫織が仰け反る。そんな紫織の反応を上目遣いで確認しつつ、壮介は左右の内腿のあちこちを噛んできた。

「ひっ、うひっ、あひん！ あうううっ、イヤ……あっ、んっ、くううん！ ダメ……そんなところ、噛み噛みしちゃ、イヤですう……あううッ！」

撫でられ、舐められた経験は何度もある。だが、こうして歯を立てられたことはなかった。

(気持ち、イイ……痛いけど、たまらない……あああ!?)

初めての責めに恍惚の表情を浮かべていた紫織に、新たな衝撃が走った。内股への甘噛みに加え、壮介が指でクリトリスと膣を愛撫してきたのだ。

「あああああっ！ あっ、あっはあああっ!!」

ここまでずっと意図的に避けられていた場所への攻撃に、紫織はあっさりと絶頂した。しかし、壮介の指は止まらない。浅ましいほどに勃起した陰核を親指の腹で転がしながら、蜜壺に侵入した中指と薬指が媚襞を擦ってくる。

「あっ、あっ、やっ、りゃめっ、今、一緒に、それ、らめえっ！ 出ちゃっ、そこ、

弱っ、あっ、んひっ、やっ、漏れちゃっ、ひっ、ひっ、ひいひいっ！」

このままでは粗相をしてしまう。それだけは回避したい紫織だったが、両脚を浴槽の縁から動かさせないため、股を閉じられない。しかも壮介は内股への甘噛み攻撃も平行的に続けてくるのだ。

(嘘、ダメ、ああ、そこ急所です、私の一番弱い場所、クリ裏、くりくりするのダメえっ！ イッチャう、出っちゃう、漏れちゃいます、壮介さんのお顔、汚しちゃいますよお！)

欲望に流されそうになるのを必死に堪えるが、紫織以上に紫織の身体を知り尽くした壮介の責めの前では、蠟螂の斧でしかなかった。

「イク、イク、イッひゃいまひゅ、らめっ、あっ、紫織、イク、イグっ、ごめんなひゃい、紫織、イク、出る、漏れまっ……あひいイーッ！ イッグ、イグううウンン!!」

大股を開いたまま、紫織はアクメを迎えた。指を締め上げ、噛まれた太腿を震わせ、大量のイク潮を愛する男の顔面に浴びせながらのオルガスムスは、凄まじい羞恥と解放感、そして気が遠くなるほどの法悦があった。

「なあ、そんなに入念に洗わなくても大丈夫だってば」

強引に湯船から引きずり出された壮介は今、バスチェアに座らされ、紫織に髪を洗われていた。自分が浴びせた体液を、なんとか洗い流したいらしい。

「私が大丈夫じゃないんです！ 壮介さんのもっと女心を学んでください！……あ、いえ、ダメです、やっぱり女心は学ばなくていいですっ」

「どっちだよ。なんでだよ」

「だって、女心を学んだら、またライバルが増えるかもしれないじゃないですか」

「増えるわけあるか。あのな、こんな中年のおっさんを好きになる物好きが三人もいるって時点で、すでに空前絶後の奇跡なんだぞ？ 普通は起きないから奇跡って言うんだぞ？」

「その、無駄に謙虚なところが危険なんです。まさかとは思いますが、私たちが以外の女に、恩を売ってたりしませんよね？ ね？ 鶴とキツネとウサギでもう恩返し枠は埋まってますからね？」

紫織の声は完璧に本気だったので、壮介は何回も「大丈夫だ」「他にいない」「俺が生涯愛するのは三人だけだ」と繰り返さなければならなかった。

「信じますよ？ 信じてますよ？ 裏切ったら、泣きますよ？ 私の前から逃げられないように、縛りつけちゃいますよ？ 物理的に。嚴重に」

こちらの声も完璧に本気だったため、壮介は若干の恐怖を抱く。もっとも、それ以上の嬉しさも感じていたが。

「自分でもわかってるんです。私、ちょっと束縛が強いというか、愛が重いというか、面倒な女だって」

「そこまでは思っていないぞ。本当に」

「いいえ、いいえ。……もし、こんな私に気分を害したときは、遠慮なくお仕置きしてくださいね？ 逃げられないようしっかりと縛って、拘束して、泣かせてくれて全然かまいませんから……！」

「……それ、きみの願望だろ？」

隠せていない、いや、そもそも隠す気もないマゾ願望に、思わず笑ってしまった。

「私がこんな面倒で厄介で重い、変態女になったのは、壮介さんにも責任あるんですよ？ わかっています？」

「わかってるさ。責任は取る」

「うふふ、ありがとうございます。……さ、シャンプー、洗い流しますね」

なんとか納得してくれたのか、紫織は明るい声で言うと、丁寧に髪をすすいでくれた。

「ありがとな」

「次は、身体を洗いますね」

「髪だけじゃないのか!？」

自分でするときの三倍の時間をかけて壮介の髪を洗ってくれた紫織は、ボディソープに手を伸ばす。

「だって……いっぱい、かけちゃいましたし」

「いつものことだし、俺はきみにぶっかけられるの、大好きなんだがな」

「そ、そ、そういうのは、さすがにデリカシーに欠けると思えますっ」

顔を真っ赤にした紫織に、じろりと睨まれた。けれど、本気で怒っているわけではない。ただの照れ隠しだ。

(うーん、可愛い。俺の恋人、マジで可愛いな。……ん？ んん?)

背中に、むにゆりとしたものが押しつけられた。

「じゃあ、まずはお背中から洗いますね……んっ……あっ……はあんっ」

たっぷりとボディソープを纏った紫織が、自分の身体を使って壮介を洗い始めた。九十四センチの爆乳の柔らかさと卑猥にしこり勃った乳首の硬さは、どんな高級タオルよりも心地よい。

「どうですか、壮介さん」

「ああ、最高に気持ちイイぞ。こんなふうの後始末してもらえらなら、潮でもおしっ

こでも、いくらでも顔面で受け止めようって気持ちになるな」

「もう、壮介さんのバカっ」

「男はいくつになってもバカなんだよ。……おおお、たまらんな、これは」

壮介が喜んでいるとわかったのか、紫織はさらに密着してきた。両手を前に回し、壮介の胸や腹、そして股間を優しく、淫らに洗う。

(くっ、むにむにとにゆるにゆるで、声が漏れそうだ……っ)

歳下の前で喘ぐのは恥ずかしいと、壮介はどうでもいい意地を張って声を堪える。だが、そんな態度はむしろ紫織を喜ばせ、より濃厚な洗体奉仕を呼ぶ。

「壮介さんの乳首、硬くなってますよ。こっちは、もっともっと硬いですけど」

紫織はくすくすと笑いながら、壮介の小さな乳首と、すっかり反り返ったペニスをいじってくる。

「きみの乳首のほうがよっぽど硬いじゃないか」

「はい、壮介さんにいっぱいいいじめ可愛がってもらったおかげで、ずっと先っぽ、しこりっぱなしなんです。はああ、こうしてるだけで、イキそうかもお」

壮介の耳に熱い息を吹きかけつつ、紫織は勃起乳首を背中に擦りつける。紫織の乳首は相当に敏感なので、本当にこれで達する可能性もあった。

(それはそれで見てみたい気もするが……俺のほうに限界だ)

壮介はバスチェアの上でぐるりと反転すると、紫織を正面から抱き締めた。

「あんっ」

紫織は一瞬驚いた顔を見せたが、すぐに嬉しげにその優しげな垂れ目を細め、壮介の背中に手を回してきた。

「きみが悪いんだぞ？　こんな素敵なおっぱいを散々擦りつけた上、老いぼれチ×ポをいじったせいで、我慢できなくなっちゃった」

「どこが老いぼれですか。知ってるんですよ、お風呂呂に入ったときからずっと、ぎんぎんにしてたこと。……ああん、がちがちで熱々う……」

膝立ちになった紫織は腰をくいくいと前に突き出し、壮介の肉竿に下腹部を押し当ててくる。ハート型のアンダーヘアに裏筋を撫でられる快感に、硬度がさらに増していく。

「自分で挿れるんだ、紫織」

「はいっ」

椅子から降り、バスマットの上であぐらをかいた壮介がそう命じると、紫織はすぐに腰を跨いできた。

「あああ、入っちゃう、入っちゃいますよお……あっ、あっ、広がっちゃう、壮介さんのオチ×ポで、紫織のオマ×コ、串刺しにされちゃう……アアッ！」

すっかり蕩けた膣肉に怒張がすべて呑み込まれると、歯形と引っ搔かれた痕をつけた三十一歳の美女が、ぐん、と仰け反った。巨大な双つの膨らみが重たげに揺れる様はとてつもなくエロティックで、壮介の牡欲を刺激する。

「紫織……ッ」

「ひんっ!? あひっ、ああっ、ダメ……先っぽ、噛み噛みされたら、私、私……ア
アーッ!!」

紫織の腰を引き寄せ、勃起乳首に前歯を立てたと同時に、壮介はグラインドを開始する。すでに亀頭は子宮口に到達しているため、ピストンではなく、腰を回すことで女体の最深部を重点的に撻る狙いだった。

（おおお、締まる……そのくせ、奥はふんわりと柔らかく、チ×ポを包んでくれる……!）

めりはりのついた膣道からもたらされる快楽を味わいつつ、紫織への愛撫も忘れな
い。目の前で誘うように揺れまくる爆乳とその先端突起に噛みつく一方で、両手で尻
を打擲する。

「んひィッ!? はうウンン! あっ、んうんッ、ダメ、イヤ、イヤァーッ!」

胸、子宮、尻へのトリプル攻撃に、マゾ美女は悩ましげに裸身をくねらせる。口で
はダメだのイヤだの言っているくせに、両脚を壮介の腰に巻きつけ、卑猥に尻を揺す

る姿は、たまらないほどに淫靡だった。

(こんなふうにいじめられて、愛されたら、私、もうあなたから離れられなくなっちゃいますっ！ 一生、壮介さんについていきます……捨てられても、絶対に逃がしません……)

全身のあちこちが熱く疼く。嘔まれ、引っかかれ、叩かれた痛みや疼き、痺れはどれも甘美だった。さらにそこに、蜜壺を穿たれ、子宮を小突かれ、再びのパンキングである、これで乱れないわけがなかった。

「うひっ、ひっ、んひんんッ！ そこらめえ、お腹の奥、ぐりぐりしゃれたら、紫織、イッひゃう、赤ちゃん、欲しくなっひゃうのお！ アーッ、アーッ！」

壮介の動きは水平方向に限定されているため、膣道を擦られる刺激は控え目だ。だが、ずっと肉鉗が最深部のリングに密着しているおかげで、常に子宮が揺さぶられる感覚があった。

「ここ、弱いんれすっ、あっ、ああっ、りやめ、子宮、イク、すぐ、イッちゃ……ひっ、ひっ、イク、奥でイク……イク……ッ……!!」

出産を経験したせい、紫織はとにかく子宮が弱かった。壮介もそれを承知してい

るからこそその、このグラインド責めなのだろう。

「らめえ、イッてます、今、すっごくイッてる途中うん！ イヤ、動かないれえ……
ひっ、ひっ、ひいひいっ！ またイク、子宮、イック……ひぎひいひいッ!?」

連続でポルチオアクメを極めようとしたその刹那、壮介が一際強く紫織の尻を打った。下と横、二方向からの刺激に襲われた子宮が喜悦に震え、経産婦だからこそ到達できる高みへと紫織を押し上げる。

「イッグ、イッグ、イグイグイグ……アアアッ、アアッ、アアッ、アアッ!!」

悲鳴じみた嬌声を浴室に響かせながら、紫織は壮絶なオルガスムスを迎える。しかし、中年男はこれでもまだ責めをやめてくれない。限界までしこった乳首をぎりぎり
と噛み締め、柔乳に新たな歯形をつけつつ、真っ赤に腫れた尻への追撃スパンキング
に、紫織はもはや叫び続けることしかできなかった。

「やらっ、あっ、イッてるっ、イッてましゅっ、もお、もお、イギっばなひいイッ！
らめっ、おかしくなっちゃっ、あっ、あっ、紫織、どうにかなっひゃ、あひいひい
ーッ!!」

あまりの法悦に、ときおり意識が飛ぶ。そのくせ腰は卑猥にくねり、子宮口はペニスへの淫らなディープキスを続ける。この愛しく逞しい牡を逃すまいと、腰に巻きつけた両脚にはさらに力が込められる。

(身体中、ばらばらになりそう……でも、でも幸せえ……壮介さんに犯され、いじめられ、愛されるの、大好き……たまらない……このまま死んでもいいっ。ううん、死にたい、イキながら殺されたい……っ)

半ば本気でそんなことを考え始めた紫織を現実に戻したのは、壮介の苦しげな呻き声だった。それが射精の予兆だと知っている紫織は、ここで腰の速度を上げ、子種の放出をせがむ。

「せーし、せえしいんっ。くだひゃい、あなたの赤ちゃん、オマ×コに、子宮にいっぱい、いっぱいごっくんさせへえ！」

だらしなく涎を垂らしたまま、紫織は中出しして欲しいと訴える。膈内以外への射精は許さないとばかりに全身で壮介にしがみつき、爆発寸前の男根を膈壁で卑猥にしごく。

「ぐっ、イクぞ、紫織……ふっ、ぐっ、うっ、ウウツ……!!」

「しゅき、しゅき、しゅき……アアッ、イク、一緒にイク……アアアアアッ！
孕みながらイク、イッグラ……ヒッ、ヒッ、ひいひいイイッ!!」

子宮にザーメンを浴びせかけられた紫織は、この日で最も深い牝悦に至った。と同時に、まるで精液へのお返しとばかりに、大量の潮と尿も噴いてしまうのだった。

冬の終わりと春の到来を感じさせる時期ではあるが、それでもまだ風は冷たい。そんな気候にもかかわらず、紫織はなぜかこの日、春物を着ていた。

「紫織、寒くないのか？　せめて上にもう一枚、なにか着込んだほうが……」

見かねた壮介に対し、紫織はにこにここと微笑んだまま、首を横に振る。

「心配してくれてありがとうございます。でも、大丈夫です。ホントはもっと袖が短いものにしたかったんですけど、さすがに目立つから、七分丈で我慢しました」

薄手のシャツを着た紫織は、そう言って楽しげに目を細める。

（目立つ？　胸がか？……あ）

ここでようやく、壮介は紫織の狙いに思い至った。壮介につけられた齒形や引っ搔いた痕を他者、つまりは結季と沙霧に見せつけ、自慢するために首筋や前腕がよく見える薄着を選んだのだと。

「なるほど、その手がありましたわね」

「あざとすぎませんか？　わたしが言うのもなんですけど」

壮介よりも先に紫織の魂胆に気づいていた結季と沙霧が、恨めしげな、妬ましげな表情を浮かべる。

「見えているだけでもあんなに齒形や引っ搔いた痕があるなら、服に隠れてるところはどれだけ……。ああ、想像しただけで羨ましくなりますわ！」

紫織と同じくマゾっ気が強い未亡人が、そのスレンダーな肢体を悩ましげにくねらせる。

「負けてられませんわ。壮さん、次は私にも紫織さんと同じ……いえ、もっと凄いことをしてくださいませね。たとえば縄で縛った痕とか……そう、ロウソクの火傷なんていかがです!？」

「張り合うなよ!? あと、火傷なんて絶対にダメ! せっかくの綺麗な肌なんだから、もっと大事にしろっての!」

「紫織さんのすべすべの肌を散々いじめておいて、説得力ありませんわよ。それに、SM用の低温ロウソクを使えば問題ないですし。あれなら火傷しませんので、安心して使ってくださいな」

「待て。まるで使ったことあるみたいな口ぶりなんだが？」

「うふふふ、いつ壮さんにいじめられてもいいように、実はもう購入してあるんですわ」

「おじさま、わたしにもやってもらいますからね! 噛みつきでも引っ掻きでも縛りでもロウソク責めでも鞭打ちでも! 紫織さんやお母様より若い分、すぐに痕は消えちゃうかもですけど!」

壮介に秋波を送る結季に負けじと、沙霧もぐっと身を乗り出してくる。

「お前もいちいち二人を刺激するなって！ あと、どっから鞭が出てきた！」

「鞭……そういうのもありましたわね！」

「淫らなウサギを鞭で調教するのは、普通じゃありませんか？」

紫織に対抗して、美しい母娘が鼻息を荒くする。

「そうですわ！ 身体中にいっぱい痕をつけてもらったら、そのままジムのプールに行くのはいかがでしょうか？ もちろん、壮さんとご一緒に」

「それ、確実に俺が犯人だってわかるやつ！ 下手すると通報コース！」

「おじさまおじさま、逆バニーってご存じですか？ 今度そのコスプレしますから、そのとき、たっぷり、みっちり、噛んだり引っ掻いたり縛ったりロウを垂らしたり鞭で打ったりお尻の処女を奪ったりしてくださいねっ」

「待て、落ち着け！」

どんどん要求が増えていく状況に、壮介は本気で焦る。

「昨日の壮介さん、凄かったんですよ？ 泣いて抗う私の内腿に歯を立てたり、無理矢理お漏らしさせたり、たっぷりスパンキングしたり……。お尻をいっぱい叩かれたせいで、今日は椅子にも座れません」

優越感を隠す気がまったくくない薄着のシングルマザーが、火に油を注ぐ。

「いや、そこまで強く叩いてないだろ!? きみ、今、普通に座ってるだろ!？」

壮介は必死に弁明するものの、三人の恋人たちはまったく聞く耳を持たない。ツツコミが追いつかない。もちろん、壮介もわかってはいる。これが紫織、結季、沙霧にとつてのコミュニケーションなのだと。

「俺、おっさんなんだぞ？ 五十三だぞ？ できるだけ頑張るけどさあ……あんまりハードル上げてくれるなよ？」

結季と沙霧から近日中に要求されるであろうプレイに応えられるかと、壮介は自信なさげな声で言う。

「ふふふ、期待してますわよ、壮^{そう}さん」

「楽しみにしてますね、おじさま」

「次は屋外でするのも悪くないですね、壮介さん」

そんな不安が杞憂に終わることを確信している三人が、いっせいに壮介を見つめる。
「ぜ、善処する」

そう答えるのが精一杯の壮介なのだった。

『逆バニーのとろける恩返し』

(ふう、なんとか落ち着いてきた。沙霧の運転、マジでどうにかならんものかな。乗るたびに酔っちまう)

買物があるからと沙霧に連れてこられたデパートの休憩スペースで、壮介は一人、ぐったりと座っていた。乗り物には強いつもりでいたが、沙霧の車にだけはなかなか慣れる気配がない。

「お待たせしました、おじさま。まだ具合、よくないですか？」

シックで大人びた装いの沙霧が戻ってきた。ごくごく自然に隣に座ると、心配そうに壮介の顔を覗き込んでくる。豊かな胸が腕に当たり、鼻が触れそうになるほどの至近距離だ。

「だ、大丈夫だ。もう、眩暈も治まった」

「おじさま、車に弱いですよね」

「いや、お前の運転に弱いだけだ。というか、沙霧の運転に耐えられるやつなんぞ、そうそういないぞ？」

「大袈裟ですねえ。わたし、運転には自信あるんですけど？」

沙霧の運転は、決して乱暴でも粗雑でもない。確かにスピードの出しすぎのきらいはあるが、基本的には安全運転だ。ではなぜ、壮介を始め、同乗した者が口を揃えて「もう乗りたくない」と言うのか。

「おじさまの三半規管が弱っているだけでは？」

不満げに口を尖らせながら、沙霧が憎まれ口を叩く。

「俺だけならその可能性も大だけどな。だったら逆に聞くが、お前の車に乗ったやつでその後、自分からまた乗せてって言ってきたケース、一度でもあったか？」

「……」

沈黙と、逸らされた視線が答えだった。

「お前の親友は乗せたのか？」

「はい。何度か」

「反応は？」

「……」

さっきよりも重い沈黙と、床に向けられた視線が雄弁に真実を物語る。

「……なにが悪いんでしょうか」

「お前の運転、なーんかリズムが妙なんだよ。怖い……いや、そう、不安にさせられるんだ。どうしてだか」

アクセルやブレーキを踏むタイミング、ハンドルを切る角度、車間距離、走行スピード、その一つ一つは特に問題はないのに、これらが組み合わさるとどうしてだか、乗る者の心と三半規管を惑わすのだ。ある意味、天性のものだろう。

「うふふ、魔性のドライビングテクニックですね」

「なんで自慢げなんだよ。断じて褒めてないからな？」

「そのくせ、わたしが誘うと、ぶつぶつ言いつつも助手席に乗ってくださるんですね、おじさまは」

嬉しそうに目を細めた沙霧が、腕を絡めてくる。十九歳の美女に密着されている五十三歳の自分が周囲にどう見られているかを思うと心配になるが、沙霧はまったく気にしていない。

「本音を言うと、俺に運転させて欲しいんだがな」

「ダメです。おじさまが乗っていいのはわたしだけです。おじさまの元気で遅いハンドルを握るのも、わたしだけです」

美しい令嬢が、妖しく微笑む。

「……買い物は、済んだのか？」

「あ、誤魔化した。……はい、最初の買い物はしてきましたよ。これです」

そう言って沙霧が見せてきたのは、細い手首に巻かれた腕時計だった。

「おじさまとお揃いですよ♥」

「お。本当だ。レディースモデルもあったんだな」

今も壮介が装着しているものよりも一回り小さなスマートウォッチには、現在時刻とともに、心拍数が表示されていた。

「わかります？ わたしがどきどきしてるの。おじさまとデートしてるからですよ？」

すぐに使いたいからと、購入したあと、大急ぎで初期設定を済ませてきたという。

「おじさまの心拍数は……ふふ、ちょっと高めですね。もしかして、わたしに密着されて、どきどきしちゃってます？」

凶星だったと認めるのは悔しかったので、壮介は無言で視線を背けた。少し前の沙霧とまったく同じ反応である。

「さ、おじさま、別のフロアに行きますよ」

「ん。他に買うものあるのか？」

「もちろんです。まずは服ですね。おじさまがわたしに着せたい、あるいは腕がせたものを好きに選んでください。当然、下着コーナーも行きますよ？」

ちらりと沙霧の時計を見ると、先程よりも心拍数が上がっていた。

「あとは、バッグとか小物、靴も。本や、地下の食品売り場も見たいですね」

「どんだけ買うんだよ」

「別に、買わなくてもいいんです。おじさまと一緒にあれこれ見て回るのが一番の目的です。だってこれ、デートなんですから」

(うっ。中年男の心を揺さぶるセリフをさらりと吐くところは、確かに魔性の女、だよなあ)

「うふふふ、おじさま、どきどきしちゃったんですね」

壮介の時計の数字を見た沙霧の笑顔に、五十三歳の心拍数は、さらに上昇してしま
うのだった。

(体験版はここまでです)